

様式6 (第15条第1項関係)

平成29年4月7日

独立行政法人  
日本学術振興会理事長 殿

研究機関の設置者の所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町36番地1	
研究機関の設置者の名称	国立大学法人京都大学	
代表者の職名・氏名	学長 山極 壽一 (記名押印)	
代表研究機関名及び機関コード	京都大学	14301

平成28年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金  
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2603	補助事業の完了日	平成29年3月31日	関連研究分野(分科細目コード)	地域研究(2701)
補助事業名(採択年度)世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化(平成26年度)				補助金支出額(別紙のとおり) 41,460,000円	

代表研究機関以外の協力機関

海外の連携機関

シンガポール国立大学、チュラロンコーン大学、タマサート大学、チェンマイ大学、マヒドン大学、カセサート大学、ガジャマダ大学、ポゴール農業大学、シアクアラ大学、王立ブノンペン大学、ハノイ理工大、アテネオ・デ・マニラ大学、フィリピン大学、マレーシアサインズ大学、ナンヤン工科大学、インドネシア大学 (計16機関)

1. 事業実施主体

担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野
主担当研究者 河野 泰之	京都大学	東南アジア地域研究研究所	教授	地域研究
担当研究者 大垣 英明 木原 正博 藤井 滋徳 落合 恵美子 久野 秀二 原 正一郎 縄田 栄治 石原 慶一 玉田 芳文 三重野 文晴 岡本 正明 梶井 克純 安里 和晃 高野 久紀	京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学 京都大学	エネルギー理工学研究所 大学院医学研究科 地球環境学堂 大学院文学研究科 大学院経済学研究科 東南アジア地域研究研究所 大学院農学研究科 大学院エネルギー科学研究科 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 東南アジア地域研究研究所 東南アジア地域研究研究所 地球環境学堂 大学院文学研究科 大学院経済学研究科	教授 教授 教授 教授 教授 教授 教授 教授 教授 教授 教授 教授 准教授 准教授	核セキュリティ技術、エネルギー科学教育 公衆衛生学 環境工学 家族社会論、福祉国家論 農業経済学、国際政治経済学 情報学 熱帯農学 エネルギー技術開発と計画 タイ政治 経済発展論 政治学・地域研究 大気環境学 国際関係論・社会福祉学 開発経済学・経済分析
計15名				

連絡担当者	所属部局・職名	連絡先(電話番号、e-mailアドレス)
中尾 久乃	南西地区共通事務部経理課外部資金 第一掛・主任	電話番号: 075-366-7121 e-mail: A50gaishi1@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

## 2. 本年度の実績概要

最終年度である本年度は、前年度に引き続き、設定した研究テーマごとに若手研究者の派遣および招聘活動を実施・継続し、研究者それぞれが最終成果提出に向けた研究課題に取り組んだ。本年度から新たに相手方研究機関を1機関追加して派遣・受入の体制を強化した。主幹部局である東南アジア地域研究研究所（平成27年1月に東南アジア研究所から改組）に設置された事務局を中心に、生存基盤研究の革新に関する国際シンポジウムの開催および英文編著執筆の取りまとめを行うなど、本事業の成果達成に向けた総括を行った。また、研究成果の発信にも注力した結果、当プログラムのホームページ（日・英）へのアクセス数は9,872件に達し、アクセス元国は93ヶ国に及んだ。

研究テーマ毎の国際共同研究の進捗は以下の通りである。

**テーマ1 ハイブリット成長の可能性：**大垣・石原は、高効率光エネルギー研究について、派遣者⑧Lim Hong En（エネルギー理工学研究所・研究員）をシンガポール国立大学に199日間派遣し、光エネルギーの革新的高効率の利用を可能にする遷移金属カルコゲナイド合成に関する共同研究を推進した。また、同大学から招聘者⑭Jaenicke Stephan、⑮Yujia Taoをあわせて51日間受け入れ、共同研究を実施した。藤井・梶井は、環境負荷の課題の克服に関わる水質と大気汚染の計測手法の研究について、ハノイ理工大学から招聘者⑯Van Dieu Anh、⑰Nguyen Duy Hungをあわせて62日間受け入れ、共同研究を継続した。久野・三重野・高野は持続的成長の社会経済モデルの研究について、タイ・タマサート大学、チュラロンコーン大学、インドネシア・ガジャマダ大学から招聘者⑱Anin Aroonruengsawat、⑲Touchanun Komonpaisarn、⑳Rangga Almahendra、㉑Kanittha Tambunlertchaiをあわせて93日間受け入れ、共同研究を実施した。

**テーマ2 環境の再生の可能性：**河野・岡本は、炭素循環や森林維持に決定的な重要性をもつ泥炭湿地管理の研究について、派遣者②塩寺さとみ（東南アジア地域研究研究所・研究員）をナンヤン工科大学等に73日間派遣し共同研究を推進した。縄田は、野生動物管理と熱帯作物の環境対応についての研究について、カセサート大学、ボゴール農業大学から招聘者㉒Khanchai Prasanai、㉓DR Syartinilia、㉔Ati Dwi Nurhayatiをあわせて91日間受け入れ、森林施業の環境対応についての共同研究を実施した。

なお、前出の藤井・梶井による水質・大気汚染の計測技術に関する共同研究は、テーマ1と2を架橋する研究としても位置づけられる。

**テーマ3 安寧社会の実現：**河野は、経済変動に対応した安寧な生活を維持する基礎的要素として重要な農村の生業転換の研究について、派遣者①小林知（東南アジア研究所・准教授）を王立プノンペン大学およびチュラロンコーン大学に計132日間派遣して共同研究を継続した。木原は、チェンマイ大学、マヒドン大学から招聘者④Suwat Chariyalertsak、⑤Kriengkrai Srithanaviboonchai、⑥Sureeporn Punpuing、⑦Chamchan Chalermopol、⑧Arunrat Tangmunkongvorakul、⑨Linda Aurpibulをあわせて64日間受け入れ、旅行者のHIV感染やソーシャルネットワークと性行動についての共同研究を推進した。原は、安寧社会にとってもっとも重要な課題の一つである災害への対応に関する研究として、派遣者⑩山本博之（地域研究統合情報センター・准教授）をアテネオ・デ・マニラ大学に60日派遣して共同研究を推進した。玉田は、民主化と非民主化に関する共同研究に取り組み、チュラロンコーン大学から招聘者㉕Viengrat Nethipo、㉖Siripan Nogsuan Sawasdeeをあわせて53日間受け入れた。なお、玉田の研究は、テーマ1と3を架橋する研究として位置づけられる。

**3 テーマ共通：分析アジア哲学と公共圏・親密圏：**上記3テーマを架橋し、その思想的・

理論的基盤を強化するために進められる諸課題について、落合・安里は派遣者⑥大西琢朗（文学研究科・研究員）を180日派遣し、共同研究の促進および総括を行うとともに、シンガポール国立大学から引き続き招聘者⑩Brenda Yeoh、フィリピン大学から⑬Tina Saavedra Clemente と⑭Michiyo Yoneno-Reyes、インドネシア大学から⑮Budianta Melanita Pranaja、チュラロンコーン大学から⑯Patcharawalai Wongboonsin、⑰Wiraporn Pothisiri を、あわせて86日間受け入れ、研究成果の共有と統合化に取り組んだ。

### 3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

本年度は、5名を派遣（合計644日間）、25名を招聘（合計500日間）し、帰国後速やかに報告書を作成・提出させ、派遣および招聘の成果を当プログラムのホームページに公開した。主/担当研究者および事務局は若手研究者の渡航計画の相談や研究環境の確認、研究の進捗状況等を把握し、必要に応じて各研究グループを主導する担当研究者をそれぞれの連携先等へ派遣して、持続型生存基盤研究のための共同研究の促進、現地の主要連携研究者と受入環境の確認調整、国際学会・セミナー等における成果発表など、積極的な国際共同研究成果の発信を行った（計8名、75日間）。また、研究支援補助者⑦寺内大左（東南アジア地域研究研究所・研究員）は、小規模農家のアブラヤシ農園開発に関する研究が評価され、東洋大学社会学部・助教への採用が内定するなど、本事業で派遣した若手研究者は研究人材として高く評価されている。さらに、日本側研究グループは多数の論文または著書、学会等の発表を行い、国際共同研究ネットワークを継続して構築・強化した。このように、本年度もASEANのトップ大学との共同研究を通して、人的ネットワークおよび学術コミュニティを強化し、学術的な理念の共有促進に取り組んだ。

また、最終年度である本年度は、革新的生存基盤研究に関する成果取りまとめのため、平成28年6月に幹事会と運営委員会を開き、最終国際シンポジウムと最終成果刊行物に向けた具体的な活動計画を定め、10の国際共同研究グループ間で確認した。翌7月には発表者/共著者と各概要を取りまとめる一方、連携強化国際ワークショップや6件の国際セミナーを通じた相互交流・啓発に基づき、生存基盤研究の国際的確立を促進した。具体的には以下のとおりである。

- ① 平成28年12月16日に本事業の総括として「生存基盤研究の革新に関する国際シンポジウム」を開催して各グループの国際共同研究の成果を報告・総括し、それを踏まえて、予定している最終成果としての編著の内容・構成について議論をした。シンポジウムには日本側と、プロジェクトの海外連携研究グループからあわせて約50名が参加し、活発な議論をおこなった。海外派遣を経験した若手研究者は、このシンポジウムで報告するとともに、セッションのオーガナイズに中心的役割を果たした。
- ② 派遣研究者、ASEAN側からの招聘研究者、本学研究者による国際共同研究の成果のエッセンスを、各グループの共同執筆による成果冊子としてとりまとめた。

タイトル：Exploring Academic frontiers for a Sustainable Future:

Challenges for Japan-ASEAN Research Collaboration

この成果冊子は、平成29年度に、改訂の上、英文編書として出版される予定である。

- ③ 2017年1月、京都大学に「アセアン研究プラットフォーム」（東南アジア地域研究研究所附属センター）を設置した。「プラットフォーム」では、超学際研究のコンセプトのもと、異分野・異業種の国際的な人材が集い日本とASEAN諸国間の長期的・広域的な視野に立った協働体制の構築を継続する。

このように、当プログラムは研究計画どおり目標を達成した。

#### 4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

##### ①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <p>・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・著者名について、責任著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については <u>下線</u>、若手研究者については <u>波線</u> を付してください。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。</p>	
1	「タイにおける政治の司法化と脱民主化」・※ <u>玉田芳史</u> ・『日本法學』第 82 巻第 3 号(2016 年 12 月)：627-651。（査読有り）
2	「タイの 2016 年国民投票：新憲法と軍政継続」・※ <u>玉田芳史</u> ・『国際情勢紀要』No. 87(2017 年 3 月)：131-149。（査読なし）
3	「タイ民政復帰への展望」・※ <u>玉田芳史</u> ・『外交』Vol. 39（2016 年 9 月）pp. 68-69（査読なし）
4	「軍の権力を温存する憲法草案承認へ」・※ <u>玉田芳史</u> ・『週刊金曜日』1100 号(2016 年 8 月 19 日)：39（査読なし）
5	「新憲法草案国民投票：周知徹底よりも違反摘発」・※ <u>玉田芳史</u> ・『タイ国情報』50 巻 4 号(2016 年 7 月)：1-10（査読なし）
6	※ <u>Takuro Onishi</u> , “Understanding negation implicationally in the relevant logic R,” <i>Studia Logica</i> , Vol. 104, No. 3, pp. 1267-1285, 2016, 査読有り.
7 ○	Montano, J., ※ <u>E. Nawata</u> and S. Panichsakpatana: Do GAP farmers do better than non-GAP farmers? Pesticide management practices of horticultural farmers in Damnoen Saduak, Thailand. <i>Trop. Agric. Dev.</i> 60: 1-9. 2016.
8 ○	Yee, M. S. and ※ <u>E. Nawata</u> : Introduction of cash crop production in Dry Zone, Myanmar: A case study of the village in Chindwin River Basin, Sagaing Region. <i>Trop. Agric. Dev.</i> 60 : 21-30. 2016.
9	※ <u>Kameda, C*</u> . and <u>E. Nawata</u> : Relationship between fallow period, forest vegetation and weeds in swidden agriculture in northern Laos. <i>Agroforest. Sys.</i> 90 doi:10.1007/s10457-016-9959-2. 2016.
10 ○	※ <u>Fujii, K.</u> , <u>C. Hayakawa</u> , <u>T. Panitkasate</u> , <u>I. Maskhao</u> , <u>S. Funakawa</u> , <u>T. Kosaki</u> and <u>E. Nawata</u> : Acidification and buffering mechanisms of tropical sandy soil in Northeast Thailand. <i>Soil Till. Res.</i> 165 : 80-87. 2016.
11 ○	※ <u>Sarra, P. S.</u> , <u>A. Sugiyama</u> , <u>A. D. B. Begoudeb</u> , <u>K. Yazaki</u> , <u>S. Araki</u> and <u>E. Nawata</u> : Molecular assessment of the bacterial community associated with Cassava ( <i>Manihot esculenta</i> Crantz) cultivation in Cameroon. <i>Microbio. Res.</i> 197 : 22-28. 2017.
12	※ <u>河野泰之</u> . 2017. 「生存基盤論と AC」, 石川智士他編『地域が生まれる・資源が育てる—エリアエイパビリティーの実践』, 東京：勉誠出版（印刷中）.
13 ○	Dao Minh Truong, Yanagisawa, M. and <u>Kono, Y.</u> 2017. Forest Transition in Vietnam: A Case Study of Northern Mountain Region, <i>Forest Policy and Economics</i> 76: 72-80.
14 ○	Anisotropic optical and electronic properties of two-dimensional layered germanium sulfide D. Tan, <u>H. En Lim</u> , N. Baizura Mohamed, S. Mouri, W. Zhang, Y. Miyauchi, M. Ohfuchi, and ※ <u>K. Matsuda</u> , <i>Nano Research</i> 10, 546-555(2017).
15 ○	Evaluation of photoluminescence quantum yield of monolayer WSe2 using reference dye of 3-borylbithiophene derivative ※ <u>N. Baizura Mohamed</u> , <u>F. Wang</u> , <u>H. En Lim</u> , <u>W. Zhang</u> , <u>S. Koirala</u> , <u>S. Mouri</u> , <u>Y. Miyauchi</u> , and <u>K. Matsuda</u> , <i>Phys. Status. Solidi.B</i> 1600563 (2017).

16	※ <u>山本博之</u> 「災害対応の地域研究」井上真編著『東南アジア地域研究入門1 環境』慶應義塾大学出版会、2017年、313-331頁。
17 ○	New System for Measuring the Photochemical Ozone Production Rate in the Atmosphere; Y. Sadanaga, S. Kawasaki, Y. Tanaka, <u>Y. Kajii</u> , ※H. Bandow; <i>Environ. Sci. Technol.</i> , DOI: 10.1021/acs.est.6b04639 (査読あり)
18	Determination of nitrous acid emission factors from a gasoline vehicle using a chassis dynamometer combined with incoherent broadband cavity-enhanced absorption spectroscopy; Y. Nakashima and ※ <u>Y. Kajii</u> ; <i>Sci. Total Environ.</i> , 575, 287-293 (2017). (査読あり)
19	Reactive Uptake of Gaseous Sesquiterpenes on Aqueous Surfaces; K. Matsuoka, Y. Sakamoto, T. Hama, <u>Y. Kajii</u> , S. Enami; <i>J. Phys. Chem. A</i> , 121, 810-818 (2017). (査読あり)
20 ○	Carboxylate Ion Availability at the Air-Water Interface; S. Enami, T. Fujii, Y. Sakamoto, T. Hama, <u>Y. Kajii</u> ; <i>J. Phys. Chem. A</i> , 120, 9224-9234 (2016). (査読あり)
21 ○	Characterization of Chromophoric Water-Soluble Organic Matter in Urban, Forest, and Marine Aerosols by HR-ToF-AMS Analysis and Excitation-Emission Matrix Spectroscopy; Q. Chen, Y. Miyazaki, K. Kawamura, K. Matsumoto, S. Coburn, R. Volkamer, Y. Iwamoto, S. Kagami, Y. Deng, S. Ogawa, S. Ramasamy, S. Kato, A. Ida, <u>Y. Kajii</u> , ※M. Mochida; <i>Environ. Sci. Tech.</i> , 50, 10351-10360 (2016). (査読あり)
22 ○	Characteristics of carbonaceous aerosols in large-scale Asian wintertime outflows at Cape Hedo, Okinawa, Japan; K. Shimada, A. Takami, S. Kato, <u>Y. Kajii</u> , S. Hasegawa, A. Fushimi, A. Shimizu, N. Sugimoto, C.K. Chan, Y.P. Kim, N.H. Lin, ※S. Hatakeyama; <i>J. Aerosol Sci.</i> , 100, 97-107 (2016). (査読あり)
23 ○	スギから放出される揮発性有機化合物のOH反応性測定および化学分析; 井田明、岡島美咲、岸本伊織、呉偉嘉、Ramasamy Sathiyamurthi、中嶋吉弘、加藤俊吾、茶谷聡、横内陽子、奥村智憲、※ <u>梶井克純</u> ; 大気環境学会誌, 第51巻 第2号 (2016). (査読あり)
24 ○	Total OH reactivity measurement in a BVOC dominated temperate forest during a summer campaign, 2014; Sathiyamurthi Ramasamy, Akira Ida, Charlotte Jones, Shungo Kato, Hiroshi Tsurumaru, Iori Kishimoto, Shio Kawasaki, Yasuhiro Sadanaga, Yoshihiro Nakashima, Tomoki Nakayama, Yutaka Matsumi, Michihiro Mochida, Sara Kagami, Yange Deng, Shuhei Ogawa, Kaori Kawana, ※ <u>Yoshizumi Kajii</u> ; <i>Atmos. Environ.</i> , doi:10.1016/j.atmosenv.2016.01.039 (査読あり)
25 ○	※ <u>Satomi Shiodera</u> , Kazuo Yabe, Masayuki Ito, Osamu Kozan, Tika Dewi Atikah and Joeni Setijo Rahajoe, 2016, Species composition and environmental factors of grasslands developing on the burnt peatlands in Sumatra, Indonesia, <i>Proceedings of 15<sup>th</sup> International IPeat Congress 2016</i> (in press).
26 ◎	<u>Satomi Shiodera</u> , Tika dewi Atika, <u>Ati Dwi Nurhayati</u> , Erianto Indra Putra, Fhoung See Yorg, Masayuki Itoh, Osamu Kozan, Joeni Setijo Lahajue, 2017, Tropical peatlands and their environmental issues in Southeast Asia: Indonesian Cases (in press)
27 ○	Transition of human and livestock waste management in rural Hanoi: a material flow analysis of nitrogen and phosphorus during 1980-2010: ※Giang, P.H., Harada, H., <u>Fujii, S.</u> , Lien, N.H.P., Hai, H.T., Anh, P.N., <i>Journal of Material Cycle and Waste Management</i> , online publication, (2016) 査読有
28 ○	Sewer discharge characteristics and water balance in dry season in Hue, Vietnam: ※Tran Nguyen Quynh Anh, Hidenori Harada, <u>Shigeo Fujii</u> , Pham Khac Lieu, Duong Van Hieu, Shuhei Tanaka, <i>Journal of Science and Technology</i> , Vol. 54, No. 2A, pp.265-272 (2016) 査読有

29 ○	3 水利用実態の現地調査に基づいたベトナム国ダナン市の生活用水の利用構造分析：※田中周平, 今田啓介, 濱島健太郎, Tran Van QUANG, 藤井滋穂, 土木学会論文集 G(環境), Vol. 72, No. 7, pp. III-387-III-395 (2016) 査読有
30	「第 2 章 重なり合う村落と都市」、『東南アジア地域研究 第 2 巻 社会』、※小林知、査読なし、慶応大学出版会、pp45-65、2017 年 2 月
31 ○	<i>Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space</i> , ※Kobayashi Satoru et al, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, 査読なし, 1-240, February 2017.
32 ○	“A Study of Attributes and Mobility of Monks and Novices in Contemporary Cambodia: With a focus on Rural and Urban Differences,” ※Kobayashi Satoru and Takahashi Miwa, <i>Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space</i> , Kobayashi Satoru et al, 査読なし, 49-66, February 2017.
33 ○	“Profiles of Buddhist Lay Ascetics in Cambodia: A Comparative Study of Kampong Thum and Kandal Province,” ※Takahashi Miwa and Kobayashi Satoru, <i>Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space</i> , Kobayashi Satoru et al, 査読なし, 67-80, February 2017.
34 ◎	“Exploring the prospects for building a peaceful society in Cambodia: A Reflection from its past and present,” ※Kobayashi Satoru and Nop Sothun, <i>Exploring Academic Frontiers for a Sustainable Future: Challenges for Japan-ASEAN Research Collaboration</i>
35	※三重野文晴 『現代東アジア経済論』 ミネルヴァ書房 共編著(共編者：深川由起子) 2017 年近刊
36	※三重野文晴 「東南アジア経済－ASEAN4 カ国の成長経路－」, 三重野文晴・深川由紀子編 『現代東アジア経済論』 ミネルヴァ書房 2017 年近刊
37	※岡本正明、2017、「インドネシアにおける政治の司法化、そのための脱司法化：汚職撲滅委員会を事例に」、玉田芳史編著『政治の司法化』、晃洋書房、74-101 頁
38	※岡本正明、2017、「政治経済」、山本信人編著『東南アジア地域研究入門 3 政治』、153-177 頁
39	※岡本正明、2017、「インドネシアにおける暴力をめぐる公私のポリティクス」、村上勇介、帯谷知可編『多元多層の共存空間－「環太平洋パラダイム」の可能性』京都大学学術出版会(近刊)
40	※久野秀二 「TPP 協定と GMO 規制」、『農業と経済』82 巻 2 号、28-32 頁、2016 年 3 月
41	※久野秀二 「遺伝子組換え作物の正当化言説とその批判的検証」、『農業と経済』83 巻 2 号、2017 年 3 月
42 ○	Hisano, Shuji, and Haja M. Rajaonarison, 'Studying Sustainable Development in an International and Multidisciplinary Setting: An experience of international graduate education at Kyoto University', AGST Working Paper Series, No. 2016-01, October 2016.
43 ○	Yang, Xing, Haja M. Rajaonarison, and Shuji Hisano, 'Financialization of agriculture in China: the role of private equity firms, agribusiness companies and local governments', AGST Working Paper Series, No. 2016-02, October 2016.
44 ◎	Musumari PM, <i>Tangmunkongvorakul A</i> , <i>Srithanaviboonchai K</i> , Manoyosa V, Tarnkehard S, Techasrivichien T, Suiguimoto SP, Ono-Kihara M, Kihara M, <i>Chariyalertsak S</i> . Risky sexual behavior among out-of-school Thai and non-Thai youth in urban Chiang Mai. Southeast Asian Journal of Tropical Medicine and Public Health 2017; 48(1): 2013-2023.
45 ◎	<i>Aurpibul L</i> , <i>Tangmunkongvorakul A</i> , Musumari PM, <i>Srithanaviboonchai K</i> , Tarnkehard S. Patterns of sexual behavior in lowland Thai youths and ethnic minorities attending high school in rural Chiang Mai, Thailand. PLoS One 2016;11(12):e0165866. doi: 10.1371/journal.pone.0165866.

46 ◎	Musumari PM, <u>Chamchan C.</u> Correlates of HIV testing experience among migrant workers from Myanmar residing in Thailand: a cross-sectional study. Plos One 2016; 11(5): e0154669
47 ◎	Musumari PM, <u>Tangmunkongvorakul A</u> , <u>Srithanaviboonchai K</u> , Techasrivichien T, Suguimoto SP, Ono-Kihara M, <u>Kihara M</u> , <u>Chariyalertsak S</u> . Prevalence and Correlates of HIV Testing among Young People Enrolled in Non-formal Education Centers in Urban Chiang Mai, Thailand: A cross-sectional study. Plos One 2016; 11(4): e0153452
48 ◎	Tuan, L.A., <u>Luong, N.T.</u> , <u>Ishihara, K.N.</u> Low-temperature catalytic performance of Ni-Cu/Al2O3 catalysts for gasoline reforming to produce hydrogen applied in spark ignition engines (2016) Catalysts, 6 (3), art. no. 45, pp. 17-45.
49	「第九章 台湾における外国人労働者政策と高齢者介護政策—国境を越えるケアの制度的整合性」安里和晃、松岡悦子編『子どもを産む・家族をつくる人類学オールターナティブへの誘い』2017年、240-268、勉誠出版。
50	安里和晃 編 (2017)『親密圏の労働と国際移動』京都大学出版会 (2017年4月刊行予定)。

## ②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <p>・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。</p> <p>・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>として下さい。</p>	
1	「タイ政治の混迷は終わるのか?」・ <u>玉田芳史</u> ・日本経済研究センター・大阪セミナー、2016年10月11日、口頭、(審査なし)
2	「タイにおける司法クレータとその政治的影響」・ <u>玉田芳史</u> ・比較政治学会2016年度研究大会、口頭、(審査あり)
3	ประชานิยมโดยกบฏถาวรภิวัฒน์, <u>Tamada Yoshifumi</u> 、国際シンポジウム 1ทศวรรษเมื่อตุลาการเป็นใหญ่ในแผ่นดิน、タイ国チェンマイ大学法学部、2016年4月22日、口頭、(審査あり)
4	「新憲法草案国民投票をめぐるタイ政治情勢」・ <u>玉田芳史</u> ・日本記者クラブ講演会、記者クラブ、2016年7月15日、口頭、(審査なし)
5	<u>Takuro Onishi</u> , “What modal operators make explicit,” Philosophy Programme Seminar, Nanyang Technological University, 2016年4月、口頭発表、審査なし。
6	<u>Takuro Onishi</u> , “A formalization of the Jaina theory of sevenfold predication,” The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, Seoul National University, 2016年8月、口頭発表、審査あり。
7	<u>Takuro Onishi</u> , “A four-valued frame semantics for the relevant logic R,” Kyoto Workshop on Dialetheism and Paraconsistency, 京都大学, 2016年10月、口頭発表、審査なし。
8	キャッサバ植物体の表層及び組織内に分布する真菌相の分析、※西村涼・佐藤宏樹・竹内祐子・遠藤力也・Jirawat Sanitchon・ <u>縄田栄治</u> 、熱帯農業学会第120回講演会、鹿児島大学農学部郡元キャンパス、口頭発表、審査有、2016/10/8・9。
9	The char lands: A new hope for Bangladesh agriculture, ※Md. A.Karim, Md. A. Quayyum, S. Samsuzzaman, H. Higuchi and <u>E. NAWATA</u> , 熱帯農業学会第120回講演会、鹿児島大学農学部郡元キャンパス、口頭発表、審査有、2016/10/8・9。

10	The challenges and opportunities of crop establishment in the char lands of northern Bangladesh, ※Md. A. Karim, H. Higuchi and <u>E. Nawata</u> , 熱帯農業学会第120回講演会、鹿児島大学農学部郡元キャンパス、口頭発表、審査有、2016/10/8・9.
12	<u>河野泰之</u> 「熱帯から考える未来社会－東南アジア研究から－」、日立京大ラボ開所式及び記念シンポジウム-ヒトと文化の理解に基づく基礎と学理の探究、2016/8/1、京都大学国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホール（京都）
13	<u>Yasuyuki Kono</u> , Japan-ASEAN Science, Technology and Innovation Platform, Kyoto-ASEAN Forum 2016、2016/9/8、Pullman Kuala Lumpur City Centre Hotel, Kuala Lumpur
14	<u>Yasuyuki Kono</u> , Talent mobility between Japan and ASEAN:Challenges of JASTIP、ASEAN STI Forum:Shaping the Future of ASEAN Innovation、2016/9/21～9/23、Shangri-La Hotel, Bangkok, Thailand
15 ○	Optical Properties of Superacid-Treated MoS2 ※ <u>Hong En Lim</u> , Nur Baizura Mohamed, Yuhei Miyauchi, & Kazunari Matsuda 第54回フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会、東京、2017年3月1-3日
16	<u>YAMAMOTO Hiroyuki</u> . “The Social Context of Evacuation during Emergency Response: Case Study of the 2007 Sumatran Earthquake”. Conference on The Relevance of Area Studies for the Sciences and Public Policy. 14-15 November 2016. The University of Tokyo.
17	<u>YAMAMOTO Hiroyuki</u> . “Towards Building Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia: Aceh in Interdisaster period”. 10th Aceh International Workshop and Expo on Sustainable Tsunami Disaster Recovery. 22-24 November 2016. Banda Aceh, Indonesia.
18 ○	異なる大気環境下での新粒子生成：京都市内と東京多摩丘陵での観測の比較 車裕輝、中山智喜、※松見豊、鶴丸央、Ramasamy Sathiyamurthi、坂本陽介、入江学、井田明、加藤俊吾、中嶋吉弘、松田和秀、 <u>梶井克純</u> Japan Geoscience Union Meeting2016、千葉県千葉市幕張メッセ、ポスター、2016年5月（審査なし）
19 ○	イソプレンによる新粒子生成抑制：京都市内と東京多摩丘陵での観測の比較 車裕輝、中山智喜、※松見豊、鶴丸央、Ramasamy Sathiyamurthi、坂本陽介、入江学、井田明、加藤俊吾、中嶋吉弘、松田和秀、 <u>梶井克純</u> 日本気象学会2016年秋季大会、愛知県名古屋市名古屋大学、口頭、2016年10月（審査なし）
20 ○	2015年夏季フィールドミュージアム多摩丘陵における光化学オゾン生成速度の直接観測 ※定永靖宗、川崎梓央、鶴丸央、Sathiyamurthi Ramasamy、坂本陽介、伊東賢介、藤井富秀、加藤俊吾、中山智喜、松見豊、中嶋吉弘、松田和秀、 <u>梶井克純</u> 第57回大気環境学会年会、北海道札幌市北海道大学、口頭、2016年9月（審査なし）
21	自動車排気ガスに含まれる亜硝酸(HONO)の排出量測定 中嶋吉弘※、今野秀典、近藤美則、 <u>梶井克純</u> 第57回大気環境学会年会、北海道札幌市北海道大学、口頭、2016年9月（審査なし）
22	日本の優勢樹種から放出される揮発性有機化合物のOH反応性測定と化学分析 岸本伊織、伊東賢介、坂本陽介、 <u>梶井克純</u> 第57回大気環境学会年会、北海道札幌市北海道大学、ポスター、2016年9月（審査なし）
23 ○	触媒酸化-非分散赤外吸収法を用いた植物起源VOCの総炭素濃度測定 伊東賢介、岸本伊織、Sathiyamurthi RAMASAMY、坂本陽介、 <u>梶井克純</u> 第57回大気環境学会年会、北海道札幌市北海道大学、ポスター、2016年9月（審査なし）
24	自動車排気ガス中の亜硝酸(HONO)排出量の測定 ※中嶋吉弘、今野秀典、近藤美則、 <u>梶井克純</u> 第22回大気化学討論会、北海道札幌市北海道大学、口頭、2016年10月（審査なし）
25	レーザーポンプ・プローブ法を用いたエアロゾルによるOHラジカル取り込み速度の新規測定法の開発 ※坂本陽介、廣川淳、 <u>梶井克純</u> 第22回大気化学討論会、北海道札幌市北海道大学、口頭、2016年10月（審査なし）



26 ○	京都市内と東京多摩丘陵での新粒子生成の比較：イソプレンによる抑制効果 車裕輝, 中山智喜, ※松見豊, 鶴丸央 Ramasamy Sathiyamurthi, 坂本陽介, 入江学, 井田明, 加藤俊吾, 定永靖宗, 中嶋吉弘, 松田和秀 <u>梶井克純</u> 第 22 回大気化学討論会、北海道札幌市北海道大学、口頭、2016年10月(審査なし)
27 ◎	Air Quality Study in Hanoi, Vietnam Yosuke Sakamoto, <u>Bich Thuy Ly</u> and※ <u>Yoshizumi Kajii</u> International Symposium on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia & The 11th Inter-University Workshop on Education and Research Collaboration in Indochina Region, Poster presentation, November 13-15, 2016, Bangkok, Thailand (審査なし)
28	※ <u>Satomi Shiodera</u> , 2016, The current issues and future directions of peat swamp forests in Indonesia -Possibility and mechanism of peatland recovery, Tropical Peatlands, Past and Future: Ecosystem Processes & Environmental Change, 2017年8月6-11日, シンガポール南洋工科大学, シンガポール(口頭発表)
29	※ <u>Satomi Shiodera</u> , 2016, Species Composition and Environmental Factors of Grasslands Developing on the Burnt Peatlands in Sumatra, Indonesia, 16th international peat congress, 2016, 2016年8月15-19日, Kucing, Malaysia, (口頭発表)
30	※ <u>塩寺さとみ</u> , 2017, 熱帯泥炭湿地林における森林の人為的攪乱とその影響, 企画シンポジウム「巨大な炭素プールである熱帯泥炭林の現状と保全に向けた取り組み」, 第64回日本生態学会大会, 早稲田大学, 東京, (口頭発表)
31 ○	し尿汚泥の性状特性・脱水性に関する越・ウ・日・瑞の国際比較: ※原田英典, Gold Moritz, <u>藤井滋穂</u> , 西田卓弘, Jean-David Therrien, Michael Cunningham, Swaib Semiyaga, Nguyen Viet Anh, Charles Niwagaba, Dorea Caetano, Linda Strande, 環境工学研究フォーラム講演集, p.1 (2016) 審査無
32 ◎	Optimum Decomposition Efficiency of some Perfluorinated Carboxylic Acids by Heated $K_2S_2O_8/H_2SO_4/UV$ Oxidation at Higher UV Light Intensity: ※ <u>Nguyen Duy Hung</u> , <u>Shigeo Fujii</u> , Dinh Quang Hung, Shuhei Tanaka, Proceeding of The 9th AUN/SEED-Net Regional Conference on Environmental Engineering (2017) 審査無
33 ○	Effect of $OD_{20}$ (twenty-hour oxygen demand) on start-up inhibition in high-solids anaerobic digestion of organic fraction of municipal solid waste and septage: ※Nguyen Pham Hong Lien, <u>Shigeo Fujii</u> , Hidenori Harada, Proceedings of International Conference Environmental Engineering and management for Sustainable Development, pp.105-110 (2016) 審査有
34 ○	Probabilistic microbial exposure analysis in an excreta-using community of rural Hanoi : ※Hidenori Harada, <u>Shigeo Fujii</u> , Masataka Kuroda, Ryo Sakaguchi, Ngyen Pham Hong Lien, Huynh Trung Hai, Proceedings of International Conference Environmental Engineering and management for Sustainable Development, pp.111-116 (2016) 審査有
35	On the Multiple Development Paths of Cambodian Rural Societies: A Reflection from Livelihoods Studies in Cambodia-Thai Border land. <u>小林知</u> . 第十回日本カンボジア研究会、京都大学東南アジア研究所、口頭発表、審査なし、2016年6月11日
36	「カンボジア＝タイ国境地域におけるコミュニティの形成と生業転換」、 <u>小林知</u> 、第26回日本熱帯生態学会年次研究大会、筑波大学、口頭発表、審査あり、2016年6月18日
37	A Comparative Study of Temple Residences in Kampong Thum and Kandal Province, Cambodia. Takahashi Miwa and <u>Kobayashi Satoru</u> . International Workshop “Mapping Buddhist Cultures of Theravadin in Time and Space”, Royal University of Fine Arts, Cambodia, 口頭発表、審査なし、2016年9月23日

38	Beyond 'Center and Periphery' : Rethinking Reconstruction of Cambodian Rural Societies since 1979. <u>Kobayashi Satoru</u> , The 13 <sup>th</sup> Asia Pacific Sociological Association Conference, 口頭発表、審査あり (招へい基調講演)、2016年9月25日
39 ◎	Prospect and obstacles to building a sense of community: A reflection from the Cambodian past and present, ※ <u>Kobayashi Satoru</u> and <u>Nop Sothun</u> , 頭脳循環国際会議、口頭発表、審査なし、2016年12月16日
40	<u>Fumiharu Mieno</u> . 2016.11.29 Seminar at ASEAN+3 Monitoring & Research Origination, "The Effects of Foreign Bank Entry on Thai Domestic Banking Sector since 2000", Singapore
41	<u>Fumiharu Mieno</u> . 2016.11.05 EAEA2016 'The 15 <sup>th</sup> International Convention of the East Asian Economic Association Sustainable and Inclusive Development in Asia and the Global Economy', Bandung, "The Effects of Foreign Bank Entry on Thai Domestic Banking Sector from 1999 to 2014: with Reference to the Pattern of Foreign Entry", with Wanxue Lu.
42	<u>Fumiharu Mieno</u> . 2016.7.12 Asian Growth Institute, Kitakyushu, "Determinants of Corporate Bond Issue in East Asia: A Demand Side View for Asian Bond Market Development"
43	<u>Fumiharu Mieno</u> . 2016.4.25 ERIA-ADB Conference on The Role of Public Finance in Asian Infrastructure Development, Asian Developing Bank Institute, Tokyo, "Discussion Public Fund and Policy-based Bank: Some Arguments on ASEAN countries"
44	Perang Wacana Sawit (War of Oil Palm Discourse), <u>Okamoto Masaaki</u> , International Seminar on The Social Economic Impact of Palm Oil Plantation, Tanjungpura University, Pontianak City, Indonesia, 口頭発表、審査なし、2016/9/1
45	「ICT社会の到来、その光と影：インドネシアを事例として」、 <u>岡本正明</u> 、<シンポジウム：ASEAN設立50周年に向けて②>『ASEANの経済社会変動』、国際機関日本アセアンセンター、口頭発表、審査なし、2016/9/14
46 ○	Corruption and Anti-Corruption Social Movement in Indonesia: A Synergy between Civil Society and the Corruption Eradication Commission, <u>Okamoto Masaaki</u> and Ade Irawan, The 40th Southeast Asian Seminar, Business Alliance Hotel, Yangon, Myanmar, 口頭発表、審査なし、2016/11/20
47	ボトムアップのフューチャーアースづくり：ICT化する東南アジアからの発信、 <u>岡本正明</u> 、Future Earth 国際シンポジウム：持続可能な地球社会にむけて-京都からの挑戦-、口頭発表、審査なし、2016年12月21日
48	Politics of ICT in Southeast Asia, <u>Okamoto Masaaki</u> , the 3rd International Conference on Planning in the Era of Uncertainty in collaboration with the 6th Kyoto University Southeast Asia Network Forum, Brawijaya University, Malang, Indonesia, 基調講演、審査なし、2017/3/7
49 ○	<u>SHOICHIRO HARA</u> and <u>AKIHIRO KAMEDA</u> : "Platform for Humanities Open Data", International Symposium on Grids & Clouds 2017(主催：Academia Sinica Grid Computing Centre)、March 5-10, 2017、Academia Sinica in Taipei Taiwan、 <a href="http://indico4.twgrid.org/indico/event/2/abstract-book.pdf">http://indico4.twgrid.org/indico/event/2/abstract-book.pdf</a> (口頭、審査有)
50	<u>Shoichiro Hara</u> : "Linked Open Data for Knowledgebase", PNC 2016 Annual Conference and Joint Meetings (主催：The Pacific Neighborhood Consortium, Academia Sinica)、August 16-18, 2016(Tuesday - Thursday)、The Getty Center, Los Angeles, California, USA、 <a href="http://pnclink.org/pnc2016/Docs/2016/Lined%20Open%20Data%20for%20Knowledgebase.pdf">http://pnclink.org/pnc2016/Docs/2016/Lined%20Open%20Data%20for%20Knowledgebase.pdf</a> (口頭、審査有)

51	原正一郎 : 「人文社会科学データベースの構築に関する考察」、第 111 回人文科学とコンピュータ研究会発表会 (主催: 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会)、2016 年 7 月 30 日 (土)、研究報告人文科学とコンピュータ (CH), 2016-CH-111(10), 1-8 (2016-07-23), 2188-8957 (口頭、審査無)
52	原正一郎 : 「デジタル・ヒューマニティーズと地域研究」、第 79 回京都大学丸の内セミナー (主催: 京都大学研究連携基盤)、京都大学東京オフィス、2017 年 2 月 3 日 (金)、 <a href="http://www.kurca.kyoto-u.ac.jp/seminar/79">http://www.kurca.kyoto-u.ac.jp/seminar/79</a> 、(講演)
53	原正一郎 : 「地域研究情報基盤による「地域の知」の蓄積・共有・利用の事例について」、むすび、ひらくアジア 2 : アジアの〈共有〉・知の〈共有〉 (主催/東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL))、東京大学本郷キャンパス法文 2 号館文学部一番大教室、2017 年 1 月 29 日 (日)、 <a href="http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/sympo2016">http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/sympo2016</a> 、(講演)
54	Hisano, Shuji, 'Just a Revival of Agrarian and Rural Values, or a Political Mobilisation against Neoliberal Food Security Project?' International Symposium on "Rethinking Food and Sustainability", Korea University, Seoul: S Korea, 12 May 2016. (招待講演)
55 ○	Jung, Sungwoong, <u>Shuji Hisano</u> , and Joost Jongerden, 'Emergence of Agrarian Prosumer (AP)', 3rd ISA Forum of Sociology, Vienna, Austria, 10-14 July 2016.
56 ○	※ Jung, Sungwoong, <u>Shuji Hisano</u> , Maria Fonte, and Joost Jongerden, 'Place Reconstruction by Agrarian Prosumer'. RC40 Mini-conference, 16th World Congress of Rural Sociology, Ryerson University, Toronto: Canada, 13 August 2016.
57	<u>Hisano, Shuji</u> , 'Studying Sustainable Development in an International and Multidisciplinary Setting: An experience of international graduate education for critical agri-food studies at Kyoto University', Internationalization of Graduate Education for Agricultural and Rural Development International Conference, PICC, Manila, Philippines, 22-23 November 2016. (招待講演)
58	<u>Ochiai, Emiko</u> , 2016, "Childcare and Child Protection Diamonds in France: Is Europe becoming like Asia?" presented at the Final Conference of 2016 Blaise Pascal chair on 'Changing Care Diamond in Europe and Asia' held on 22-23 September at EHESS, Paris.
59	<u>Ochiai, Emiko</u> , 2016, "Longevity revolution and the reconfiguration of the intimate and public spheres: European paths and Asian paths" presented at the Final Conference of 2016 Blaise Pascal chair on 'Changing Care Diamond in Europe and Asia' held on 22-23 September at EHESS, Paris.
60	<u>Keiichi N. Ishihara</u> [Invited], "Activation of Li by Mechanical Milling for Energy Conservation and Storage", STEMa2016, July 27-9, Pattaya, Thailand
61	<u>Keiichi N. Ishihara</u> , "The nexus of energy and agriculture", Oral presentation, AUN/SEED-NET the 2016 Regional Conference on Energy Engineering (RCEnE 2016), Phnom Penh, Cambodia
62	"Welfare Regime in Asia: Diversity in Similarity" <u>ASATO, Wako</u> , The 2016 Annual Conference of Social Welfare Association of Taiwan Transformation of Welfare System in Aging Society: Governance, Political Party and Citizen Movement, invited speaker, Chaiyi, Taiwan, May 14, 2016.
63	「超高齢社会をどう支えるかー アジア諸国の試行錯誤」 <u>安里和晃</u> 、「セミナー 少子高齢化への対応策を考える」(招聘) 大阪薬科大学、2016 年 5 月 21 日
64	"Japanese-Filipino Children and Trafficking", <u>ASATO, Wako</u> , CHILDREN ON THE MOVE: MIGRANT CHILDREN AND YOUTH IN ASIA, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 10th June 2016.

65	“Neo-Plural Society from the Perspectives of Intersection between Migration and Welfare Regime: Cases from Gulf Countries”, <u>ASATO, Wako</u> , 日本国際政治学会, 幕張メッセ, October 15, 2016.
----	---

## 5. 若手研究者の派遣実績（計画）

### 【海外派遣実績（計画）】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
派遣人数	4 人	6 人 (3 人)	5 人 (5 人)	7 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

### 【本年度の海外派遣実績】

#### 派遣者①の氏名・職名：小林知・准教授

（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

小林は、カンボジアの王立プノンペン大学を派遣先とし、適宜タイのチュラロンコーン大学に滞在しながら、（3）「安寧社会の実現」の課題の一つである農村の生業転換についての共同研究（③）を推進する。王立プノンペン大学のなかでも、開発学部は特に、2000年代後半以降に欧米・アジア各国で博士・修士号を取得して帰国した優秀な若手研究者を多く抱える。小林は、それらの人材をパートナーとして、農村地域の生業転換に関する独自の研究蓄積と、文理融合型地域研究を特徴とする日本側研究グループの視角を融合させた「革新的生存基盤研究ネットワーク」を形成し、日本・ASEAN間およびASEAN諸国間の国際研究ネットワークの強化を推進する。平成26年度はカンボジアおよびタイに2～3ヶ月間滞在し、研究ネットワークの形成の準備を行う。平成27年度は、カンボジアに4ヶ月間滞在し、現地の大学院生向けのセミナーを開催するなどして、研究ネットワークの定着を計る。平成28年度は、カンボジア、タイおよびその他のASEAN諸国に滞在し、研究ネットワークの域内の拡大と浸透を推進する。

（具体的な成果）

2016年10～11月、2017年1～3月の期間内の計4ヶ月をカンボジアで過ごし、王立プノンペン大学開発学科の教員諸氏を主なカウンターパートとするカンボジア農村の生業転換に関する共同研究を推進した。講師らの共同研究室に通って適宜議論を行った。2017年1月9日にはワークショップを実施し、カウンターパートの主な講師陣と、タイのカウンターパートであるチュラロンコーン大学アジア文化研究センターの研究員に、各自の研究を発表してもらい、質疑を行った。2017年2月には、2度にわたって同国ポーサット州の農村にでかけ、生業活動の変遷に関する調査を行った。同月にはまた、一週間弱タイへ渡航し、チュラロンコーン大学の関係者と会って、東南アジア大陸部社会の変容に関する議論を行った。プノンペンでは、王立プノンペン大学開発学科に加えて、王立農業大学も頻繁に訪問し、同大学の講師陣を相手に農村生業の変容に関する議論をおこなった。

派遣先	派遣期間	
-----	------	--

(国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
カンボジア、王立プノンペン大学、開発学部、Ngin Chanrith	33 日	125 日	120 日	347 日
タイ、チュラロンコーン大学、経済学部 Somprawin Manprasert	56 日	0 日	5 日	
カンボジア、王立プノンペン大学、Room2 (国際会議参加)	0 日	1 日	0 日	
ミャンマー、ビジネス・アライアンス・ホテル (国際会議参加)	0 日	0 日	7 日	

派遣者②の氏名・職名：塩寺さとみ・研究員

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

泥炭火災が熱帯泥炭湿地林は巨大な炭素の貯蔵庫として、また生物多様性の揺籃として、これまで重要な機能を果たしてきた。しかし、開発による泥炭湿地林の破壊はその機能を急速に失わせ、近年では膨大な量の二酸化炭素の放出が問題視されている。塩寺は(2)「環境再生の可能性」の課題の一環である、泥炭湿地管理のテーマ(②)の中で、インドネシア国中部カリマンタン州、およびリアウ州を対象地域に、排水路建設という人為的攪乱が泥炭湿地林の森林機能にもたらす影響を明確化することを目的とし、次の点に着目して研究を行う。排水路建設によって引き起こされる乾燥化による、1) 森林群集動態、種組成と森林構造の変化の解明—サイズ依存的影響の検証—、2) 樹木の植物季節的な成長と展葉・落葉タイミング、葉寿命への影響、3) 樹木の個葉特性といった森林機能の変化の解明、および 4) 森林群集全体の炭素固定能力に与える影響の定量化を通じた森林システムの総合的理解、を行う。さらに、シンガポール近郊の都市林において、森林再生と保全についての研究を行う。また、これと平行して、インドネシア、マレーシア、シンガポールを主とした東南アジア全域における泥炭湿地管理のハブ形成を行う。

(具体的な成果)

今年度はシンガポール南洋理工大学に滞在し、論文執筆と植物同定のスキルの向上に努めた。また滞在中は、シンガポール、インドネシア、マレーシアで行われた研究集会で複数回の発表を行った。論文執筆に関しては、泥炭湿地林に関する学術論文 1 報、書籍 1 章、ニューズレターの記事 2 報の執筆を行った。特に書籍の論文に関しては、本プログラムで構築したネットワークを用いたインドネシア、マレーシアの共同研究者との共同執筆であり、本プログラムの成果物として出版される書籍に掲載予定である。また、シンガポール国立大学の研究者と協力し、ブルネイの泥炭湿地林における調査も開始した。

(国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
インドネシア、ボゴール農業大学、農学部 Ernan Rustiadi	69 日	47 日	0 日	340 日
インドネシア、国立航空宇宙研究所(国際会議参加)	4 日	0 日	0 日	
インドネシア、Helmes palace hotel(国際会議参加)	2 日	0 日	0 日	

マレーシア、サインズ大学、生物科学部／ Foong Swee Yeok	0 日	63 日	0 日	
シンガポール、ナンヤン工科大学、アジア 環境科学部／Shawn K.Y. Lum	0 日	80 日	73 日	
マレーシア、マレーシア国民大学（国際会 議参加）	0 日	2 日	0 日	

**派遣者⑤の氏名・職名：山本博之・准教授**

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>山本は、（3）「安寧社会の実現」の課題の一環として、災害とコミュニティの機能に関わる研究（⑧）を推進する。2015 年 5 月にアテネオ・デ・マニラ大学にて Filomeno Aguilar 教授と研究打ち合わせを行う。同月から 6 月にかけて、同大学図書館にて資料収集を行うとともに、同大学の研究スタッフとの情報共有・意見交換を行う。7 月から 12 月にかけてフィリピンのサマル島およびレイテ島でフィールド調査を行う。サマル島ではカルバヨグ市、レイテ島ではタクロバン市を拠点とし、それぞれ市の災害リスク削減委員会で情報収集を行うとともに、市内の中国系住民のインフォーマントを通じて災害対応における混血者コミュニティに関する情報収集を行う。2016 年 1 月から 3 月にかけて、アテネオ・デ・マニラ大学の図書館にて追加資料を収集するとともに、同大学の研究スタッフと意見交換を行い、研究成果を取りまとめる。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>派遣先であるアテネオ・デ・マニラ大学のフィリピン文化研究所で 2016 年 5 月に行われた公開セミナーで、「Arts and techniques of sharing common destiny among the Philippine people in the era of rapid urbanization and global migration」と題する報告を行い、本プログラムの滞在期間に取り組んだ研究成果の一部を発表し、参加者からフィードバックを得た。防災・災害対応においては、工学的対応や政策・制度の観点から進めるだけでなく、文化芸術を含む社会の防災・災害対応の経験や知見を掬い出し、それを社会全体に共有可能な形にすることも重要であること、その際には混血者や越境者についても十分に目配りすべきであることなどについて議論を深めた。</p>				
---	--	--	--	--

派遣先 （国・地域名、機関名、部局名、受入研究者）	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
フィリピン、アテネオ・デ・マニラ大学、社会学部 Filomeno Aguilar	0 日	268 日	60 日	328 日

**派遣者⑥の氏名・職名：大西琢朗・研究員**

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>（1）「ハイブリッド成長の可能性」、（2）「環境再生の可能性」、（3）「安寧社会の実現」という 3 つの課題に関わる研究を推進する。大西は、平成 24 年 11 月に京都大学大学院文学研究科にて博士号を取得。課題を架橋する思想、理念的基盤の構築を目指して、哲学分野における「分析アジア哲学の構築」（⑨）に関する国際共同研究に参加する。具体的には、同大学に在籍する「分析アジア哲学」の世界的研究者のセミナー等に参加し、アジア哲学の文献読解作業と、それを分析し再構築する現代の理論的ツールの</p>				
--	--	--	--	--

習得・開発に従事する。その上で、同テーマについての英文専門論文を執筆し国際誌に発表する。また文学研究科との間で予定されている遠隔授業・会議に参加するとともに、その運営全般にかかわる。さらに文学研究科教員とシンガポール国立大学教員が共同で執筆する論文集・教科書の編集作業に関わりつつ、自らもそれらに寄稿する。

(具体的な成果)

前年度に学術誌に投稿した関連性論理に関する論文が採択、掲載された。また、南洋理工大学哲学科のセミナーにおいて様相論理についての発表を行った。これらの形式論理的な研究を踏まえつつ、今期はとくにジャイナ教の重要な論理的原理である「Sevenfold predication」に注目し、その現代論理学の観点からの合理的再構成を試みた。研究成果は、韓国・ソウル大学で行われた The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia 内のワークショップ A Frontier of Analytic Asian Philosophy において発表された。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
シンガポール、シンガポール国立大学、人文社会学部、Jay Gerfield	0 日	183 日	176 日	363 日
韓国、ソウル国立大学 (国際会議参加)	0 日	0 日	4 日	

**派遣者⑧の氏名・職名：Lim Hong En・研究員**

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

Lim は、平成 26 年度末に辞退した派遣者③吉田恭平に替わって、(1)「ハイブリッド成長の可能性」の課題の一環に位置づけられる高効率の光エネルギーに関する研究(④)を平成 27 年 11 月より推進する。主に Goki Eda, Loh Kian Ping らの研究室にて、将来、光エネルギーの革新的高効率利用を可能にする、ナノカーボン(ナノグラフェンなど)、遷移金属カルコゲナイドに関する研究を行う。ナノカーボン(ナノグラフェンなど)、遷移金属カルコゲナイドなどの新たに合成法の確立や、ラマン・発光分光等を用いて光学的特性の評価を行い、その特性を明らかにする。

(具体的な成果)

高効率太陽光利用に資するために、新しい原子層材料作製を試みた。本年度は、スズと硫黄との反応またはセレン化スズの粉末の再結晶する化学気層堆積成長法により、硫化錫(SnS)とセレン化スズ(SnSe)の結晶の作成に成功した。高い光学特性が期待される厚さ結晶を成長するため、成長条件を調整しつつ同時に結晶を薄くする方法を開発した。成長した結晶をアルゴン雰囲気の中で高温アニーリングすることで、厚さが大幅に減少し必要とされるサブナノメートル薄膜に成功した。しかし、原子間力顕微鏡による測定から、表面に大きな凹凸が存在しており、高品質薄膜の最適化に更なる条件の最適化が必要である。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
シンガポール、シンガポール国立大学、理学部化学学科、LOH Kian Ping・Young-Tae Chang	0 日	105 日	199 日	304 日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

## 6. 研究者の招へい実績（計画）

### 【招へい実績（計画）】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
招へい人数	16 人	21 人 (8 人)	25 人 (15 人)	39 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

### 【本年度の招へい実績】

#### 招へい者④の氏名・職名：Suwat Chariyalertsak・教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>テーマ：（3）安寧社会の実現 — 6. 旅行・SNと性感染症</p> <p>HIV/AIDS 流行においては、セックスワーカー、MSM、薬物静注使用者、移民、若年層が、リスク集団と考えられているが、タイ王国における初期の HIV/AIDS 流行は、薬物静注使用者とセックスワーカーを中心としたものであったため、従来、これらの集団を対象とする研究は数多くされてきた一方で、移民や正規の教育を受けられない若者は、脆弱性の高さが予想されながらも研究ほとんどなされないままであった。招聘者は、これらの集団について、京都大学と国際共同研究を実施する。</p> <p>質問票を用いて、チェンマイ都市部の非正規教育プログラムに参加する若者、チェンマイ農村部の高校に通っている部少数民族の若者について、性行動や HIV 検査受診行動、及びそれらに関連する要因を探索し、非正規教育プログラムに参加する若者、及びチェンマイ農村部の高校に通っている部少数民族の若者における調査の、データ収集と管理、データ分析の指導を行い、かつ分析結果の解釈や論文執筆についての議論を行う。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>2016 年 12 月 11 日～21 日に京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻を訪問された。過去 3 年間、チェンマイの若者の HIV /エイズ関連プロジェクトに関して非常に生産的な協力関係を築けたことを再確認し、また、研究に関する議論を行った。チェンマイの高齢化に対応した e-ヘルスの発展に関する今後の計画について、文部科学省の研究助成を目指すことを検討した。12 月 14 日・15 日に開催された「2016 年若手パブリックヘルス研究者京都国際会議」に参加し、タイの保健システムとユニバーサル・ヘルス・カバレッジに貴重なインプットを提供した。12 月 16 日に開催された「生存基盤研究の革新に関する国際シンポジウム」にも参加した。その他に、Suwat Chariyalertsak 教授は大学院生に対して研究指導を行った。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チェンマイ大学、健康科学研究所、タイ 木原正博（京都大学）	9 日	8 日	11 日	28 日



招へい者⑤の氏名・職名：Kriengkrai Srithanaviboonchai・助教

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(3) 安寧社会の実現 — 6. 旅行・SNと性感染症

HIV/AIDS 流行においては、セックスワーカー、MSM、薬物静注使用者、移民、若年層が、リスク集団と考えられているが、タイ王国における初期の HIV/AIDS 流行は、薬物静注使用者とセックスワーカーを中心としたものであったため、従来、これらの集団を対象とする研究は数多くされてきた一方で、移民や正規の教育を受けられない若者は、脆弱性の高さが予想されながらも研究ほとんどなされないままであった。招聘者は、これらの集団について、京都大学と国際共同研究を実施する。

質問票を用いて、チェンマイ都市部の非正規教育プログラムに参加する若者、チェンマイ農村部の高校に通っている部少数民族の若者の、性行動や、HIV 検査受診行動、及びそれらに関連する要因を探索し、非正規教育プログラムに参加する若者、及びチェンマイ農村部の高校に通っている少数民族の若者における調査の、データ収集と管理、データ分析の指導を行い、かつ分析結果の解釈や論文執筆についての議論を行う。

(具体的な成果)

2016年10月28日～11月7日に京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻を訪問された。都市のチェンマイにおける現代の生活様式と10代の若者の性的関係に関する研究(WYSH Project-Chiang Mai)、HIVとともに生きる高齢者の健康行動、健康状態、生活の質に関する第2相試験、チェンマイにおけるHIV感染者の健康行動、生活の質および保健サービスの利用に関する研究や、妊娠中または出産後1年以内のHIV感染したタイ人および移住労働者のうつ病の蔓延・生活の質・性的および生殖に関する健康に関する研究などの計画や将来性について議論した。滞在中、以下の2本の論文の評価や修正も重点的に行った。

- ・「Risky Sexual Behavior and HIV Testing among Unmarried Out-of-school Thai and Non-Thai Youth in Urban Chiang Mai, Thailand」
- ・「Sexual behavior, perceptions of love and relationships and use of youth friendly health services of young migrant workers in urban Chiang Mai, Thailand: A mixed methods study」

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チェンマイ大学、健康科学研究所、タイ 木原正博（京都大学）	6 日	12 日	11 日	29 日

招へい者⑥の氏名・職名：Sureeporn Punpuing・准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(3) 安寧社会の実現 — 6. 旅行・SNと性感染症

HIV/AIDS 流行においては、セックスワーカー、MSM、薬物静注使用者、移民、若年層が、リスク集団と考えられているが、タイ王国における初期の HIV/AIDS 流行は、薬物静注使用者とセックスワーカーを中心としたものであったため、従来、これらの集団を対象とする研究は数多くされてきた一方で、タイ王国の重要な労働力となっているミャンマーからの移民については、脆弱性の高さが予想されながらも研究ほとんどなされないまま

であった。招聘者は、ミャンマー人移民について、京都大学と国際共同研究を実施する。ミャンマー人移民における HIV 検査受診行動に関する要因を評価、HIV/AIDS に対する知識、リスク認知と予防行動に関連する要因を探索する。本研究には、世界基金の支援を受け、移民に対して HIV/AIDS 予防啓発を行っている NGO 団体である Raks Thai が所有する 2010 年時点ベースラインデータ (PHAMIT-2) を使用し、研究実施過程におけるデータ分析管理、研究結果の解釈、論文執筆に関する議論を行う。

(具体的な成果)

2017 年 1 月 23 日～1 月 31 日に京都大学医学研究科社会健康医学系専攻を訪問された。滞在中、研究の概念的枠組みを開発するため、タイの移民労働者の HIV / AIDS 防止を目的にする Phamit プロジェクト (ベースラインとエンドラインの両方のデータセット) からデータを分析し、研究の進行について議論した。データの制限に関して多くの問題が存在することを情報共有することができました。タイの最も危険な人口の中で、性的や静脈内薬物使用のリスク行動に関与する可能性がより高い囚人のデータについても調べた。研究プロジェクトの他に、Sureeporn Punpuing 准教授は大学院生に対して研究指導も行った。

招へい元 (機関名、部局名、国名) 及び 日本側受入研究者 (機関名)	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
マヒドン大学、人口問題研究所、タイ 木原正博 (京都大学)	6 日	9 日	9 日	24 日

招へい者⑨の氏名・職名：Van Dieu Anh・講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(1) ハイブリッド成長 / (2) 環境の再生 — 7. 水・大気の汚染の計測  
環境中の日用品由来医薬品 (PPCPs) の分析技術を学び、そのリスクアセスメントを学ぶ。同分野での京都大学とハノイ理工科大学のベトナムにおける今後の共同研究の基礎となる。

(具体的な成果)

招聘期間中、地球環境学環境調和型産業論分野にて、受入教員の藤井教授と水環境の汚染実態調査の遂行について議論を行った。また、協力機関である京都大学大学院工学研究科附属流域圏総合環境質研究センターにて、田中教授の指導のもと、河川堆積物中の医薬品および日用品由来の化学物質 (PPCPs) の測定手法について検討を行った。さらに、今年度までに得られた成果を取りまとめ、既報の水生生物影響濃度との比較から、生態影響リスクを評価する手順について習得した。頭脳循環による招聘は、今期は 1 回のみであるが、今後、成果公表に向け研究交流を続けることも合意した。

招へい元 (機関名、部局名、国名) 及び 日本側受入研究者 (機関名)	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ハノイ理工科大学、環境理工学部、ベトナム 藤井滋穂 (京都大学)	63 日	31 日	16 日	110 日

招へい者⑩の氏名・職名：Chamchan Chalernpol・助教

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(3) 安寧社会の実現 - 6. 旅行・SNと性感染症

HIV/AIDS 流行においては、セックスワーカー、MSM、薬物静注使用者、移民、若年層が、リスク集団と考えられているが、タイ王国における初期の HIV/AIDS 流行は、薬物静注使用者とセックスワーカーを中心としたものであったため、従来、これらの集団を対象とする研究は数多くされてきた一方で、タイ王国の重要な労働力となっているミャンマーからの移民については、脆弱性の高さが予想されながらも研究ほとんどなされないままであった。招聘者は、ミャンマー人移民について、京都大学と国際共同研究を実施する。ミャンマー人移民における HIV 検査受診行動に関する要因を評価、HIV/AIDS に対する知識、リスク認知と予防行動に関連する要因を探索する。本研究には、世界基金の支援を受け、移民に対して HIV/AIDS 予防啓発を行っている NGO 団体である Raks Thai が所有する 2010 年時点ベースラインデータ (PHAMIT-2) を使用し、研究実施過程におけるデータ分析管理、研究結果の解釈、論文執筆に関する議論を行う。

(具体的な成果)

2016 年 12 月 12 日～20 日に京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻を訪問された。この度、タイの移民労働者の HIV / AIDS 防止を目的とする Phamit プロジェクトの過去 3 年間のコラボレーションや今後のプロジェクト研究の進行について議論した。12 月 14 日・15 日に開催された「2016 年若手パブリックヘルス研究者京都国際会議」に参加し、タイの保健システムとユニバーサル・ヘルス・カバレッジに貴重なインプットを提供した。12 月 16 日に開催された「生存基盤研究の革新に関する国際シンポジウム」にも参加した。また、Musumari 先生と Phamit の刊行草案と研究に関して議論を行った。

招へい元 (機関名、部局名、国名) 及び 日本側受入研究者 (機関名)	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
マヒドン大学、人口問題研究所、タイ 木原正博 (京都大学)	4 日	10 日	9 日	23 日

招へい者<sup>⑩</sup>の氏名・職名：Anin Aroonruengsawat (講師)

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(1) ハイブリッド成長の可能性 - 1. 持続的成長モデル

タマサート大学経済学部は本学経済学研究科の交流協定校であり、大学院生の教育研究指導でも共同学位プログラムを視野に入れた国際連携関係を構築することになっている。とくに ASEAN+3 地域を対象にした国際経済学・国際金融論、環境経済学・エネルギー産業論、農業経済学・食料安全保障 論等、招聘研究者の専門分野に応じて国際共同研究を進め、その成果を国際連携大学院教育にも活かしていく。

(具体的な成果)

Thammasat University が契約を結んでいるタイの National Credit Bureau の所有する口座レベルの融資データを用いて、融資モラトリアム政策が借金返済やその後の融資利用状況に与えた影響を検証する共同研究を開始した。今後、引き続き双方を訪問して共同研究を進めていく予定である。

招へい元 (機関名、部局名、国名) 及び	招へい期間	
----------------------	-------	--

日本側受入研究者（機関名）	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
タマサート大学、経済学部、タイ 久野秀二（京都大学）	0 日	54 日	30 日	84 日

**招へい者⑱の氏名・職名：Touchanun Komonpaisarn・講師**

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

テーマ：（1）ハイブリッド成長の可能性 — 1. 持続的成長モデル

チュラロンコーン大学経済学部は本学経済学研究科の交流協定校であり、教育と研究の両面で国際連携関係を構築することになっている。とくに ASEAN+3 地域を対象にした国際経済学、環境経済学、健康経済学の3分野で国際共同研究を進め、毎年度もしくは各年度で開催する国際合同ワークショップ等の場でその成果を発表する。

【招へい者⑱Touchanun Komonpaisarn 講師の平成 28 年度招へい取りやめ理由と研究計画全体への影響】

諸般の事情により、計画していた招へいが困難となったため、代わりに所属を同じくする⑳Kanittha Tambunlertchai 講師を新規に平成 28 年度に 45 日招へいする。これにより変更に伴う影響はなく、本事業の最終成果に向けて環境経済学およびマイクロファイナンスを専門とする㉑と国際共同研究を行うことは非常に有意義である。

【招へい者⑱Touchanun Komonpaisarn 講師の平成 28 年度招へい追加理由と研究計画全体への影響について】

平成 28 年度の交付申請時に、諸般の事情により招へいを一旦取りやめたが、再度日程調整した結果招へいが可能となったため、追加で招へいする。国際シンポジウムでの研究成果の発表、および最終成果の出版に向けた執筆に関する打ち合わせを行い、国際共同研究のさらなる体制強化を目指す。

（具体的な成果）

頭脳循環の最終成果となる Book chapter の内容の一部について、カンファレンスで報告してもらい、今後のリバイズの方角を確認した。特に、途上国が経済発展して感染症対策が進んで死亡率が低下するなか、食生活の変化も影響して医療政策上重要度が増えつつある Noncommunicable disease についてのタイの事例を、行動経済学の知見も交えながら報告してもらった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チュラロンコーン大学、経済学部、タイ 久野秀二（京都大学）	0 日	65 日	11 日	76 日

**招へい者㉒の氏名・職名：Rangga Almahendra・講師**

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

テーマ：（1）ハイブリッド成長の可能性 — 1. 持続的成長モデル

ガジャマダ大学経済経営学部は本学経済学研究科の交流協定校であり、教育と研究の両面で国際連携関係を構築することになっている。とくに ASEAN+3 地域を対象にした国際経済学・地域発展論、国際経営学・企業戦略論等の分野で国際共同研究を進め、可能であればタマサート大学やチュラロンコーン大学と合同で国際ワークショップを開催し、そこで研究成果を発表する。

(具体的な成果)

- ① 過去の新興国を対象とした多国籍企業研究や、国際的知識移転とトランスナショナル組織に関する研究について検討したうえで、逆知識移転と現地の自律性と埋め込みとの関係を研究テーマとして抽出し、以後共同研究を進めることで合意した。
- ② インドネシアに進出している日本の多国籍企業を対象とした事例研究を実施するための研究デザインについて議論した。ホンダ、味の素、デンソーの各社について調査の可能性を探求することとし、日本、インドネシア両サイドから聞き取り調査を実施することで合意した。
- ③ すでに実施済みの質問票調査について、いくつかの項目を組み合わせることで、逆知識移転に関連した変数を抽出できないか検討し、定量分析の可能性を検討した。
- ④ 共同研究の成果については、今後論文や学会発表の形にしていく。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ガジヤタガ大学、経済経営学部、インドネシア 久野秀二（京都大学）	0 日	33 日	21 日	54 日

招へい者②の氏名・職名：Khanchai Prasanai・講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(2) 環境の再生 — 5. 野生動物管理と熱帯作物の環境対応／森林施業の環境対応

森林の持続的な管理についての共同研究を進める。熱帯林業においては、低インパクト伐採の導入が進み、森林土壌や地上植生へのダメージを低減させる施業が一般的となっているが、このような伐採方法を適用した場合の森林地へのダメージが実際に測定された例はすくない。本共同研究で、タイの植林地を中心にして、伐採、集材方法の改善が、林地に与える影響を定量的に評価して、今後の森林施業の改善点を明らかにする。招聘研究者は、実際の森林施業時のデータの取得を担当し、京都大学の研究者とともに、解析を進め、研究成果を国際シンポジウムで発表する予定である。さらに、プログラムの最終成果物の出版に向け執筆に関する打ち合わせを行い、国際共同研究のさらなる体制強化を目指す。

(具体的な成果)

タイ北部の試験地で行った伐採実験の結果を用いて、データ解析と論文作成を京都大学で行った。実験では、伐採強度の違いによる林床植物の量と多様性、ならびに土壌表層の硬度の反応を見ることで、林地への影響を評価した。伐採強度を増加させることにより、植物多様性とバイオマスは有意に減少し、また土壌硬度も有意に増加した。この結果は伐採強度の増加によって、土壌表層の土壌流出を防ぐ効果のある林床植生が衰退し、土壌浸食が増加する可能性が高いこと、ならびに土壌硬度の増加により雨水の土壌浸透量が減少し土壌表層流となって流下しやすくなることを示しており、土壌劣化を誘発しやすいことを示している。伐採による経済的効果と、このような森林での土壌浸食のリスク増加を評価しながら、適切な伐採強度を設定することの重要性が確認できた。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び	招へい期間	
--------------------	-------	--

日本側受入研究者（機関名）	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
カセサート大学、林学部、タイ 縄田栄治（京都大学）	0 日	62 日	7 日	69 日

**招へい者②の氏名・職名：DR SYARTINILIA・講師**

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>テーマ：（2）環境の再生 — 5. 野生動物管理と熱帯作物の環境対応／森林施業の環境対応</p> <p>上記研究者を招聘し、近年の熱帯地域の土地利用、農業体系の変容、野生生物管理に関する共同研究を進める。熱帯地域では、近年、経済発展やグローバリゼーションの進行により、急速に土地利用、農業体系の変容が急速に進んでいる。さらに、農業の商業化が著しく、自給農業中心の農業体系・作付体系から、商品作物中心の農業体系・作付体系への移行が顕著である。このような状況下で、伝統的な、それなりに持続的だった農業体系は、変容を迫られている。本共同研究では、インドネシアで、農業商業化の著しい地域、変容の緩やかな地域を選定し、変容の実態を明らかにすると同時に、新たに導入されたシステムの持続性と野生生物に及ぼす影響を評価する。招聘研究者は、現地調査の共同実施、現地二次データの収集・分析を担当する。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>日本滞在中に、長距離の渡りを行う鳥類の中でも、広い食物網を必要とする猛禽類の渡りについて、日本にもわたってくるハチクマを対象とした渡りの実態に関する調査研究の結果をまとめた。インドネシアにおいては、ハチクマの一部はスマトラ島からボルネオ島に移動するが、そのために大半の渡りの個体が立ち寄る島が存在することが明らかになっており、そのようなネックとなる島における鳥類の生息環境保全の重要性と、それを受け入れるための生業体系が急速に変化しつつある地域住民の対応の必要性について考察し、主に観光の視点からの配慮とそのため住民との話し合いが必要であることが示された。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ボゴール農業大学、農学部、インドネシア 縄田栄治（京都大学）	0 日	62 日	42 日	104 日

**招へい者③の氏名・職名：Tina Saavedra CLEMENTE・准教授**

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>テーマ：三課題共通 — 9. 分析アジア哲学の構築／親密圏と公共圏の再構築</p> <p>社会学分野における「アジア地域における親密圏と公共圏の再編成」に関する国際共同研究に参加する。特にフィリピンにおけるエスニックマイノリティの生成と変化を取り扱い、事例として「Chineseness 概念の検討」というフィリピンにおける「中華系」を取り上げる。滞在期間中に研究会とセミナーを実施し、親密圏/公共圏のあり方が、中国の台頭、関係変化によってエスニックマイノリティにどう影響を及ぼすかを検討する。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>Tina Clemente 氏はフィリピンのマイノリティ問題に詳しいため、昨今の南シナ海における南沙諸島の領土問題などによって中華系フィリピン人がどのような影響を受けてい</p>				
---	--	--	--	--

るのかについて研究を行い、今年度2回に分けて来日し2回の報告を行った。また、今年度には予期していなかったがフィリピンの政権交代により、民主主義を再考する機会ともなり、政権と貧困層との関係なども変化したという点で、2度の招聘は大きな動きと重なった。そこで議論に広がりを持つことができたは予想以上の成果であった。調査によれば基本的には対中国感情はマスコミ報道よりは悪化していない点が興味深い点として提示された。Tina氏によると、日比の対中国関係においては類似性も認められるが、相違点も見られる点が興味深いとしている。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
フィリピン大学、アジアセンター、フィリピン 落合恵美子（京都大学）	0日	13日	17日	30日

**招へい者⑳の氏名・職名：Jaenicke Stephan・准教授**

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）  
 テーマ：（1）ハイブリッド成長の可能性 — 4. 高効率の光エネルギー  
 招聘者は Prof. Loh Kian Ping の研究室のメンバーであり、光エネルギーの革新的高効率利用を可能にする、界面化学・触媒化学について、エネルギー理工学研究所および関連研究室にて共同研究を行う。

\*諸般の事情により招聘が困難となった LOH Kian Ping 教授に替えて同所属より招聘、国際共同研究を予定どおり遂行する。

（具体的な成果）  
 シンガポール国立大学 Jaenicke Stephan 准教授を招へいし、光エネルギーの有効利用という観点から、太陽電池製造に必要な資材、製法を調査し、材料化学の観点から将来を予想し、現在行われている研究が実用化された場合におけるエネルギー回収年や環境影響などの研究を行った。今回の大きな発展は化学工学で用いられるプロセスシミュレータを用いて未だ実用化されていないプロセスを仮想的に組み立て、物質およびエネルギーフローを見積もることが可能であることが分かった点であり、従来困難とされてきた実用化されていない技術の将来評価に今後期待できる。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
シンガポール国立大学、理学部、シンガポール 大垣英明（京都大学）	0日	0日	23日	23日

**招へい者㉑の氏名・職名：Michiyo Yoneno-Reyes・准教授**

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）  
 テーマ：三課題共通 — 9. 分析アジア哲学の構築／親密圏と公共圏の再構築  
 社会学分野における「アジア地域における親密圏と公共圏の再編成」に関する国際共同研究に参加する。および招聘者の協力を得て京都大学で授業を実施する。京都大学滞在中には、フィリピン政府在外フィリピン人委員会（CF0）との協力により京都大学アジア研究教育ユニットが実施しているフィリピン人移民の日本渡航前研修事業にインターン

シップとして参加する学生の指導もお願いする。

(具体的な成果)

Yoneno-Reyes 氏には、高齢化するアジアの福祉国家化のプロセスにおける、移住介護労働者の送り出し国の位置づけについて担当してもらった。同氏の研究によると、フィリピン政府は先進国の高齢化を見据えて国家資格整備をおこない、資格の相互認証を通じて送り出し政策を推奨している。他方で、2000 年代以降のフィリピン政権においては、移住労働は人々の選択肢として位置づけられており、政策の揺らぎが生じている。そして、フィリピンがベトナム、インドネシアとともに送り出し国としての協調体制を構築することが、アジアの福祉国家の安定条件となっていることを指摘している。

以上の研究成果は、滞在中にセミナーで報告してもらった。最終的には、ショートペーパーを統合して出版の予定である。同氏は学生交流の受け皿ともなっており、同氏の招聘を通じた教育・研究上の成果を十分にあげることができたと考える。

Yoneno-Reyes 氏は、平成 28 年 8 月までフィリピン大学准教授として参画。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
フィリピン大学、アジアセンター、フィリピン 落合恵美子（京都大学）	0 日	62 日	7 日	69 日

#### 招へい者⑳の氏名・職名：Nguyen Duy Hung・研究員

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(1) ハイブリッド成長 / (2) 環境の再生 — 7. 水・大気汚染の計測  
ハノイおよび京都の大気中の微粒子に付着する多環芳香族炭化水素 (PAHs) の測定を学ぶ。同時に、人への曝露レベルを推計する。その結果は、2 都市において人への PAHs 由来の健康リスクのアセスメントに供され、それらの比較解析を行う。

(具体的な成果)

招聘期間中、地球環境学環境調和型産業論分野にて、受入教員の藤井教授との議論のもと、微量汚染物質の最適な回収率を得るための前処理を含めた条件を検討するとともに、京都において試料採取分析を実施した。併せて、健康リスクアセスメントの手法を学び、具体的な曝露レベル推計の手順を習得した。さらに、その後の研究計画についても綿密に論議し、帰国後ハノイでの調査の詳細、およびハノイ、京都の 2 都市の結果比較手順について討議した。頭脳循環による招聘は、今回の 1 回のみであるが、今後、他予算で受入教員の訪問、招聘者の再招聘を実施し、研究交流を続けることも合意した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び	招へい期間	
--------------------	-------	--



日本側受入研究者（機関名）	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
ハノイ理工大学、環境理工学部、ベトナム 藤井滋穂（京都大学）	0 日	0 日	46 日	46 日

招へい者⑳の氏名・職名：**BUDIANTA, Melanita Pranaja・教授**

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>テーマ：三課題共通　－　9. 分析アジア哲学の構築／親密圏と公共圏の再構築</p> <p>哲学分野における「分析アジア哲学の構築」に関する国際共同研究に参加する。具体的には、京都大学の研究者との日常的な共同研究を行ない、共同で論文集・教科書を執筆するとともに、国際セミナー等を開催し国内外の研究者からなるネットワークを構築する。またシンガポール国立大学との遠隔授業・会議に参加するのに加え、招聘者の協力を得て京都大学で英語授業を実施する。これらの授業に、国内外の学生・若手研究者も参加させることで、京都大学が分析アジア哲学における国際研究教育拠点となることが期待される。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>Melanita Pranaja BUDIANTA 教授には、アセアン統合が及ぼす当事者アイデンティティへの影響についての研究に従事してもらった。アセアン経済共同体の成立は、すでに社会的諸力の 1 つを構成するに至っている。これはアジアの多層構成の文化アイデンティティにも影響し、1 つの層を成して、そこで自他境界の明確化が生じている。ただし加盟国ごとに状況は異なっており、また「Chineseness」の形成も国によって大きく異なっており、文脈依存となっている。これらの研究成果はセミナーにおいて報告してもらい、本学における情報の共有と還元を図った。</p>				
--	--	--	--	--

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
インドネシア大学、人文科学研究科、インドネシア 落合恵美子（京都大学）	0 日	0 日	29 日	29 日

招へい者㉑の氏名・職名：**Brenda Yeoh・教授**

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>テーマ：三課題共通　－　9. 分析アジア哲学の構築／親密圏と公共圏の再構築</p> <p>テーマに従い、最終報告書を念頭に、高齢化とケアのあり方の変容を通じ親密圏/公共圏の再構築について取り組む。シンガポールと日本の比較のため、京都滞在時には聞き取り調査を実施、具体的には老人ホーム訪問、厚生労働省、日本介護福祉士会など職能団体などを対象とした聞き取り調査を行う予定である。また、滞在中にセミナーを開催し成果報告とする。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>Brenda Yeoh 教授は移民研究の第一人者であり、今回の成果出版の執筆者の 1 人である。同教授には社会統合、人口構成の変化、家事労働者や移民等のさまざまな観点からの知見をまとめて、シンガポールにおける多様性やコスモポリタンについて論じてもらった。現在の動向は、プラナカンのような植民地期の人々の移動や社会統合とは異なり、グローバル化の 1 つの帰結としての現在の人の移動である。グローバル化における国民経済と</p>				
---	--	--	--	--

多様性の構成は、その政治性が同時に問われるものである。今後の課題は、多様性政策と公共圏・親密圏における出会いの場、それを通じて形成される新たな関係性であろう。同教授の研究成果はセミナーで報告されたほか、研究科長や社会学教室との面談もおこない、今後の研究・教育交流について意見交換した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
シガポール国立大学、人文社会科学部、シガポール 落合恵美子（京都大学）	0 日	0 日	8 日	8 日

招へい者③の氏名・職名：Viengrat Nethipo・助教

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

テーマ：（10）民主化と非民主化

本研究が柱に据えるハイブリット成長、安寧社会の実現は、公平で効率的な政府の存在なくしては達成が不可能であり、上記課題について研究する。ASAFAS や CSEAS のスタッフと意見交換を行う。さらに、セミナーを開催し、「世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化」への寄与を目指す。Viengrat 助教は地方政治研究を専門としている。民主化を含む国政の変化と、農村部の社会経済的な変化は関連し合っており、タイにおいてはこの 10 年、政治の激動は、農村部住民の生業が変化し、農外収入に依存するようになったことと密接に関係していると考えられている。インドネシアやカンボジアをはじめとする ASEAN 諸国の農村部における生業構造の変化が政治にどのような影響を与えるのかを研究する。これは「民主化と非民主化」に関わる研究の一部をなすものである。平成 28 年度からの招へいが繰り上げになり平成 27 年度からの招へいとなった。

（具体的な成果）

ウィエンラット氏は 2016 年度には京都に 37 日間滞在し、12 月 16 日開催の国際ワークショップでは我々のチームを代表して報告した。ウィエンラット氏はワークショップでの報告用に「地方分権化の政治：民主的分権化 vs. 中央集権的官僚国家」というタイトルの論文を京都で仕上げた。この論文は、1990 年代以後民主化と分権化が歩調を合わせて進んできたものの、2006 年以後は集権化が始まり、民主化を阻害していることを明らかにした。ウィエンラット氏は、再集権化の背景には、民主化への反発だけではなく、19 世紀末の近代化で構築された中央集権国家の恩恵を享受してきた君主制、官僚制、軍隊といった勢力による巻き返しがあると指摘する。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チュラーロンコーン大学、政治学部、タイ 玉田芳文（京都大学）	0 日	6 日	37 日	43 日

招へい者④の氏名・職名：Siripan Nogsuan Sawasdee・准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(10) 民主化と非民主化

本研究が柱に据えるハイブリット成長、安寧社会の実現は、公平で効率的な政府の存在なくしては達成が不可能であり、上記の課題について研究する。ASAFAS や CSEAS のスタッフと意見交換を行う。さらに、セミナーを開催し、「世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化」への寄与を目指す。Siripan 准教授は、民主政治の実現に不可欠な制度基盤としての選挙をめぐる考察を研究する。ASEAN 諸国では選挙民主主義の実現を希求する権威主義体制の国も、選挙民主主義を否定しようとする民主主義体制の国もある。こうした政治観研究は、「民主化と非民主化」の一部をなすものである。平成 28 年度からの招へいが繰り上げになり平成 27 年度からの招へいとなった。

(具体的な成果)

シリパン氏は 12 月 16 日開催のワークショップに合わせて来日し、16 日間滞在した。この間に、最終報告書の一部となる論文を執筆した。我々のチームの共通トピックは「民主化の挫折」であり、シリパン氏はこの点について選挙制度の改革から切り込んだ。すなわち、2014 年クーデタで破棄された 2007 年憲法に代わるものとして、遅ればせながら 2016 年に起草された新憲法において、選挙制度がどのように定められているのかを明らかにし、新選挙制度が民主化にどのような影響を与えるのかを考察した。結論を言えば、投票の価値を低下させることで、民主化を阻害する選挙制度が導入されようとしている。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チュラーロンコーン大学、政治学部、タイ 玉田芳文（京都大学）	0 日	8 日	16 日	24 日

招へい者⑳氏名・職名：**Arunrat Tangmunkongvorakul・講師**

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(3) 安寧社会の実現 — 6. 旅行・S N と性感染症

HIV/AIDS 流行においては、セックスワーカー、MSM、薬物静注使用者、移民、若年層が、リスク集団と考えられているが、タイ王国における初期の HIV/AIDS 流行は、薬物静注使用者とセックスワーカーを中心としたものであったため、従来、これらの集団を対象とする研究は数多くされてきた一方で、移民や正規の教育を受けられない若者は、脆弱性の高さが予想されながらも研究ほとんどなされないままであった。招聘者は、これらの集団について、京都大学と国際共同研究を実施した。

質問票を用いて、チェンマイ都市部の非正規教育プログラムに参加する若者、チェンマイ農村部の高校に通っている部少数民族の若者について、性行動や HIV 検査受診行動、及びそれらに関連する要因を探索し、非正規教育プログラムに参加する若者、及びチェンマイ農村部の高校に通っている部少数民族の若者における調査の、データ収集と管理、データ分析の指導を行い、かつ分析結果の解釈や論文執筆についての議論を行う。

\*招聘日数が減少した招聘者④Suwat Chariyalertsak、⑤Kriengkrai Srithanaviboonchai に替わって新規に招聘し、国際共同研究を予定どおり推進する。

(具体的な成果)

2016年10月28日～11月12日に京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻を訪問された。都市のチェンマイにおける現代の生活様式と10代の若者の性的関係に関する研究(WYSH Project-Chiang Mai)、HIVとともに生きる高齢者の健康行動、健康状態、生活の質に関する第2相試験、チェンマイにおけるHIV感染者の健康行動、生活の質および保健サービスの利用に関する研究や、妊娠中または出産後1年以内のHIV感染したタイ人および移住労働者のうつ病の蔓延・生活の質・性的および生殖に関する健康に関する研究などの計画や将来性について議論した。

滞在中、以下の2本の論文の評価や修正も重点的に行った。

- ・「Risky Sexual Behavior and HIV Testing among Unmarried Out-of-school Thai and Non-Thai Youth in Urban Chiang Mai, Thailand」
- ・「Sexual behavior, perceptions of love and relationships and use of youth friendly health services of young migrant workers in urban Chiang Mai, Thailand: A mixed methods study」

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
チェンマイ大学、健康科学研究所、タイ 木原正博（京都大学）	0日	16日	16日	32日

招へい者③の氏名・職名：Kanittha Tambunlertchai・講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：(1)ハイブリッド成長の可能性 — 1. 持続的成長モデル

チュラロンコーン大学経済学部は本学経済学研究科の交流協定校であり、教育と研究の両面で国際連携関係を構築することになっている。とくにASEAN+3地域を対象にした開発経済学、環境経済学、健康経済学の3分野で国際共同研究を進め、ワークショップ等の場でその成果を発表する。

(具体的な成果)

Kanittha 講師と、貧困層の金融アクセスについて共同研究を開始した。タイやミャンマーの金融アクセスに関するデータを検証したのち、タイにおける貯蓄と借入の同時利用行動、およびタイのバイクタクシーの金融アクセスに関する共同研究をすることになった。同時利用行動については、MITのTownsend教授の家計調査データを用い、分析のモデル構築を進めている。また、バイクタクシーの金融アクセスに関する研究では、7月にベースライン調査を実施したのち、金融教育に関する介入を行って、9月にエンドラ

イン調査を実施する予定である。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チュラロンコーン大学、経済学部、タイ 久野秀二（京都大学）	0 日	0 日	31 日	31 日

**招へい者⑳の氏名・職名：Patcharawalai Wongboonsin・教授**

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

テーマ：三課題共通 － 9. 分析アジア哲学の構築／親密圏と公共圏の再構築

社会学分野における「アジア地域における親密圏と公共圏の再編成」に関する国際共同研究に参加する。招へい者は京都大学文学研究科を中心にして実施している「アジア地域のケアレジームの比較研究」および家族数量調査国際比較研究のメンバーであり、とりわけ福祉国家の未発達なアジア地域における家族の役割に注目した研究を行っている。比較研究の成果は英文の書籍として出版を計画している。人口学、および家族の専門家として本研究を遂行するにあたり適切である。

（具体的な成果）

Patcharawalai 教授には、東南アジアにおけるケア関係の再構築についての研究に従事してもらい、タイ、ベトナム、マレーシアの事例から、以下の点を明らかにした。これらの国々では、伝統的には世代間扶養が期待されてきたが、出生率低下や平均寿命の伸長、高学歴化、労働力率の増加により社会・経済的環境が変化した。多世代同居は減少し、近隣居住が増大した。家族規模が縮小し、個人化が進展したにもかかわらず、国家役割は限定的であった。また人口構成の変化により、慢性疾患の期間が長期化し、インフォーマルケアの持続が困難となっている。認知症などのネガティブな烙印が家族統合や社会統合をより困難にする懸念もあり、それを防ぐためにも適切な政策介入が必要である。独居、認知症、老々介護など、国家役割では十分に捕捉されないグループについてはコミュニティ、NGO などからの多角的な支援が求められる。そのためにも、ケアのシャドールワーク化は好ましくない。世代間扶助はケアの「部分」を占めるもので、それだけを強調するのはリスクである。以上の知見は、次世代ワークショップのラウンドテーブルにて基調報告として共有された。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チュラロンコーン大学、ASEAN 研究センター、タイ 安里和晃（京都大学）	0 日	0 日	14 日	14 日

**招へい者㉑の氏名・職名：Yujia Tao・助教**

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)  
 テーマ：(1)ハイブリッド成長の可能性 — 4. 高効率の光エネルギー  
 シンガポール国立大学エネルギー研究所より Yujia Tao 氏を招へいする。再生可能エネルギーの ASEAN 地区への社会導入政策等に関する研究を行う。主にエネルギー科学研究科および関連研究室にて共同研究を実施する。

(具体的な成果)  
 1ヶ月の滞在の間に、ASEAN 各国の再生可能エネルギーに関する政策について双方の所有している資料に基づき議論を行い、特に発展途上にあるミャンマー、ラオス、カンボジアの農村において効果を大きいことを確認し、地方発展の方策についてまとめた。また、タイエネルギー省から来ている博士課程の学生とも議論を行い、タイにおけるエネルギー政策やエネルギー統計に関する資料について情報交換を行なった。さらに、関西電力堺港発電所を訪問し、高効率天然ガス発電所の設備を見学し、東南アジアへの導入可能性を議論するための基礎資料を収集した。そのまとめとして最終日に研究会を開催し、そこで研究発表をしてもらい意見交換を行なった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
シンガポール国立大学、エネルギー研究所、シンガポール 石原慶一（京都大学）	0 日	0 日	28 日	28 日

招へい者⑳の氏名・職名：**Ati Dwi Nurhayati**・講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)  
 テーマ：(2)環境の再生 — 5. 野生動物管理と熱帯作物の環境対応／森林施業の環境対応  
 インドネシアでは近年森林火災による森林バイオマスや泥炭の焼失が大きな問題となっている。一方で、タイでは乾燥落葉林の火災は森林自体の存続に必須の条件となっており、森林火災の制御をすべきかどうか森林管理上の議論のテーマになっている。このように、森林火災の防除、消火、予防に関する管理方針は、森林タイプやその森林の管理目的によって柔軟に変化させる必要がある。  
 本研究ではインドネシアとタイと日本の森林政策上、森林火災がどのように扱われているかの現状を明らかにし、望ましい将来の森林火災対応策を検討する。

(具体的な成果)  
 インドネシアの泥炭地火災についての研究レビューを京都大学で行った。Ati 氏自身が実施した火災時に発生する煙の中に含まれている毒性成分の解析結果や、火災の発生と地下水位の関係の解析データ、火災予防のための教育普及活動などさまざまな面からレビューを行った。これらのレビュー結果から、泥炭地火災に対する効果的な予防策、対応策についての提言を行った。また、京都大学で実施している泥炭地の研究プロジェクトに従事する多くの研究者と交流することにより、今後の研究協力について具体化させることができた。成果は、本プロジェクトの成果本の中に日本側研究者との共著論文として収録される予定である。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ボゴール農業大学、林学部、インドネシア 縄田栄治（京都大学）	0 日	0 日	42 日	42 日

**招へい者④の氏名・職名：Linda Aурpibul・研究員**

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>テーマ：（3）安寧社会の実現 — 6. 旅行・SNと性感染症</p> <p>HIV/AIDS 流行においては、セックスワーカー、MSM、薬物静注使用者、移民、若年層が、リスク集団と考えられているが、タイ王国における初期の HIV/AIDS 流行は、薬物静注使用者とセックスワーカーを中心としたものであったため、従来、これらの集団を対象とする研究は数多くされてきた一方で、移民や正規の教育を受けられない若者は、脆弱性の高さが予想されながらも研究ほとんどなされないままであった。招聘者は、これらの集団について、京都大学と国際共同研究を実施する。</p> <p>質問票を用いて、チェンマイ都市部の非正規教育プログラムに参加する若者、チェンマイ農村部の高校に通っている部少数民族の若者の、性行動や、HIV 検査受診行動、及びそれらに関連する要因を探索し、非正規教育プログラムに参加する若者、及びチェンマイ農村部の高校に通っている少数民族の若者における調査の、データ収集と管理、データ分析の指導を行い、かつ分析結果の解釈や論文執筆についての議論を行う。</p> <p>【招へい者④Aурpibul 研究員を平成 28 年度に追加招へいする理由および研究計画全体への影響】</p> <p>国際シンポジウムへ参加し参加者らと意見交換を行う。研究ネットワークおよび人的ネットワークのさらなる体制強化を目指す。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>2016 年 12 月 12 日～19 日に京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻を訪問された。12 月 14 日・15 日に開催された「2016 年若手パブリックヘルス研究者京都国際会議」に参加し、タイの保健システムとユニバーサル・ヘルス・カバレッジに貴重なインプットを提供した。12 月 16 日に開催された「生存基盤研究の革新に関する国際シンポジウム」にも参加した。滞在中、今後の計画を含め、進行中のコラボレーション、進捗状況について話し合った。今後は「Assessment of risk behaviors, and mental health of perinatally HIV-infected youth」と題する論文に関して共同研究を行う予定である。2017 年にチェンマイと近隣の州で調査を行うために資金援助を申請する予定である。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チェンマイ大学、健康科学研究所、タイ 木原正博（京都大学）	0 日	0 日	8 日	8 日

**招へい者④の氏名・職名：Wiraporn Pothisiri・准教授**

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

テーマ：三課題共通 - 9. 分析アジア哲学の構築／親密圏と公共圏の再構築

人口構成の変化に伴い、高齢者ケアへの対応が大きな課題となっているが、その政策の動向、実効性、政府・家族・市場の役割について検討する。

招へい者②Worawet Suwanrada 氏が急遽招へい取りやめとなったため、所属を同じくする Wiraporn 氏を招聘し、当初予定していた研究を遂行するため、研究計画全体への影響はない。

(具体的な成果)

Wiraporn 氏は人口政策、社会政策の専門であり、今回の招聘においてはタイの人口動態、高齢者ケア政策を中心としつつ、階層問題、少子化問題についても議論を行った。同氏には福祉レジームにおけるコミュニティの役割についてタイの政策動向に準じて議論してもらった。基礎自治体基金や長期ケア基金という 2 階建て自治体基金の創設を通じて主体が決定権を持つ長期ケアに関する予防、健康促進、高齢者介護などの分野が確立されつつある点が報告された。これは政府の役割、市場の役割とは異なったコミュニティ中心の政策であり、日本にとっても示唆的な事例として取り上げることができるであろう。こうした政策は農村部においては効果があるものと考えられるが、都市部や Upper class に対しては課題が残るという点が指摘された。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
チュラロンコーン大学、人口学研究科、タイ 安里和晃（京都大学）	0 日	0 日	11 日	11 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

## 7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

該当なし

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。